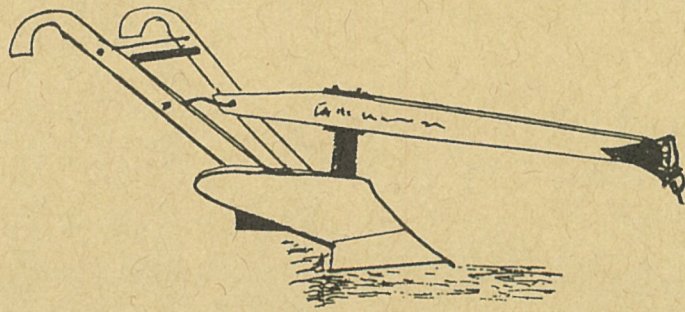


菅野豊治と語る



この物語は、少年の頃から豊治を知っている
唯一の人、金子全一さんによって平成四年に書かれました。

菅野豊治と語る

■耕す一途に

白い農機で知られているスガノ農機は、プラウの専門ト
ップメーカーです。農業の原点である耕す分野で農家の人
と一緒に土づくりのお役に立とうと励んでいます。

一九八〇(昭和五十五年)年、茨城県稲敷郡美浦村に大きな
工場を建てました。

現在、日本のプラウ市場の八割は
この工場で生産し、日本農業機械の
業界では、中堅のメーカーに発展し
ています。

このように発展したのは、もちろ
ん二代目の良孝社長や現在の三代目
祥孝社長の大変な努力もありますが、
その原点となっている菅野農機具製
作所の創立者、菅野豊治を語らずに
はいられません。



【プラウ】土を耕す農機具でボトムプラウ(洋犁)のこと。明治のはじめアメ
リカから北海道へ輸入された。

【原点】すべての基準となる点。

【中堅】ある仲間で、地位などが中ぐらいのこと。

【創立者】はじめて設立する人。

■豊治生誕百年

一八九四(明治二十七年)年、九月一日。豊治は七人兄弟の
六番目として、現在の岩手県江刺市
で生まれました。

十二才のとき、豊治は父や母たち
といっしょに上富良野村へ、開拓農
民として引越してきました。そし
て、十六才のとき近くの松岡鉄工場
に、丁稚奉公で入りました。

朝は暗いうちから鉄を焼いて打っ
て、クワやマサカリなどを作り、夜
は早く仕事を終わらせて、友達佐
藤敬太郎たちと、金子商店の前で楽
しく遊んでいました。



【七人兄弟】男六人、女一人。

【松岡鉄工場】現在の上富良野町道央信用組合のところ。

【丁稚奉公】むかし、職人や商人の家につとめて、働くわかももの。

【佐藤敬太郎】豊治と同じ年令、豊治の友達。

【金子商店】現在の上富良野町きくや呉服店。

■独立開業

一九一七(大正六)年、二月二日。二十四才のとき、豊治は現在の上富良野農協の近くで、菅野農機具製作所を始め、クワ・マサカリや山林用具などを作りながら、プラウの修理もしていました。そのとき、両親をよんでいっしょに生活を始めました。

次の年の春には、プラウの修理が一二〇台にもなっていました。研究熱心な仕事ぶりは評判が良く、お店の中はいつも農家の人々が入れ替わり立ち替わりで、にぎわっていました。

この時代の開墾は、道具もそろっていなかったので大変苦勞していました。また、未墾地^{*みこんち}でのプラウ耕^{こう}は、石や木の根などが多いためプラウが曲ったり減ったりします。

豊治は、それを一生懸命に修理をしていました。そんな姿を見ていた三枝甚作^{*}は、豊治の熱心な仕事ぶりにほれこみ、「プラウ作りをやってみないか」と、すすめました。やがて、そのことがきっかけになり、豊治が二十六才のとき、甚作の娘サツを伴侶^{*はんりよ}として迎えたのでした。

豊治は二十九才のときカリエス^{*}におかされ、長い闘病生^{とうびょうせい}活^{かつ}に入ることになってしまいました。しかし、注意深い療^{りよう}

養^{よう}と厚い信仰^{しんこう}によって予想以上に早く健康をとり戻すことができました。その間、一番弟子^{でし}の十八才の佐野長吉^{*}とサツが家業^{*かぎよう}を守りつづけました。

この闘病生活によって、豊治には人間の運命感と、いかなる困難にもたえしのぶ強い精神力ができたがったのです。



〔開墾〕山や野をきり開いて、田や畑をつくること。

〔未墾地〕完全に田や畑になっていない土地。

〔三枝甚作〕ひしや 一八七六(明治九年)、北海道開拓に富山県から入植。道庁の要請で一九〇〇(明治三三年)、上富良野島津家の農場開拓に人夫をつれて入り、二頭曳^{ひき}きプラウの馬耕^{うまこう}で二〇〇ヘクタール、九八三、四七一m²の開墾を手伝う。

〔伴侶〕道づれ。とも。つれ。およめさん。

〔カリエス〕骨がおかされ、うみの出る病氣。

〔療養〕病氣をなおすために、からだを休め手当てをうけること。

〔佐野長吉〕さの ちよきち。のちに、菅野農機具製作所の工場長として満州^{まんしゅう}へ渡る。

〔家業〕家の商売。

■初代の町長だ

豊治は、各地へプラウの説明に歩きまわっていました。ある農協へ手みやげを持って訪ねたとき、「産地はどこか」と、聞かれ、「上富良野村」と、答えると、「それならダメだ」と、手みやげだけ食べられた日もありました。そのため、プレートに『上富良野町』とほつて出荷し、豊治は、「私が初代の町長だ」と、笑っていました。

「手みやげ」人を訪ねるときに持つていく簡単なみやげ。

「プレート」社名などをほりこんで、製品にはりつける金属の板。

■旅人との出会い

ある日、豊治の店に乞食こじきのような旅人が訪ねてきました。服装はきたなくても、豊治はひとりの人間としてあたたかく迎えました。そして、何が気に入ったのか酒まで飲ませて家に泊めたので、家族はブツブツ文句を言いました。

次の朝、旅人は家族がまだ寝ている間に、ひとつのメモを残して出ていきました。そのメモには三層鋼板さんそうこうはんの作り方

が書かれていました。きつと豊治のプラウづくりに役に立つと思ったのでしょうか。

その後、豊治はメモをヒントにして研究をかさね、ついに菅野式炭素焼プラウを完成させました。

しかし、畑の土質どじつがいろいろあつて、すべての畑でじょうずに耕すことができませんでした。

そこで豊治は、出張で汽車に乗ったときは、停車中の間に近くの畑へいつて土を集め、試験管に地名を書き込んで、工場にたくさん並べていました。その集めた土で、それぞれの土質にあうプラウの研究をかさね、粘土質用・火山灰用・水田用・泥炭地用などに合うプラウを完成させました。

その努力が認められ、北海道庁の奨励農機具に六寸深耕プラウと八寸深耕プラウが指定され、日本甜菜製糖株式会社を通して製造、販売されました。そして、各地の展覧会や審査会で、いつも上位入選し、菅野式プラウの名声を広く高めたのでした。



【三層鋼板】鉄の層が、表面と裏面が硬く中間部が軟くなっている。表面は、耐摩耗性^{せいまいそう}で衝撃^{しょうげき}に強い。プラウのモールドボードに使用されている。

【炭素焼】普通鋼板に炭素を浸透^{しんとう}させて、三層鋼板をつくる技法のこと。浸炭^{しんたん}ともいう。

【奨励】よいとして、すすめがけますこと。

【六寸深耕プラウ】「寸」は昔の長さの単位、一寸は約三・〇三cm。深さが、約一八cmまで耕^{うが}せるプラウのこと。

「上川号」

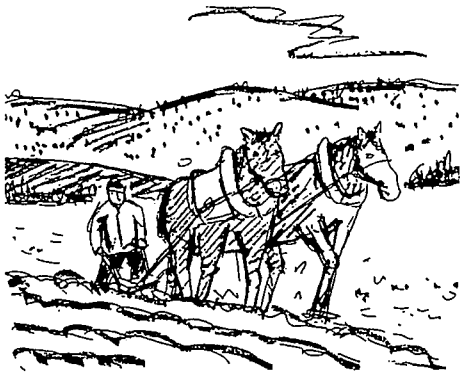
満州を耕す

*まん しゅう

たがや

都府県の農家は耕地面積^{*こうち}がせまく、次男・三男は、独立するにも田や畑をつくる土地がありません。そのこともあって満蒙開拓^{まんもう}は、国をあげた大事業で進んでいました。

現地では、畜力^{*ちくりきよく}農法が従来から行なわれていて、クワで耕す都府県のやりかたは、厳しい寒さの広野では能率が悪く、作業がいつこうに進みませんでした。国は、「北海道の



畜力^{*}プラウ農法でなければ開拓が遅れる」と、方針を変更し、北海道の篤農家^{*とく}二〇〇戸を満蒙開拓団^{*}のそれぞれの团长にして、満州に渡らせました。そして、畜力プラウ農法は大成しました。

プラウの出荷要望に豊治は、何回も満州に行きました。ある日、大量の受注をもらってきた豊治は、国の大事業と考えて、「上川支庁管内のすべての業者で製作をしよう」と、決断しました。そして、業者に声をかけました。

その当時小さな工場が多く、中には修理専門だけでプラウ製作の経験がない工場もありました。豊治は、プラウ製作の経験がない人には、豊治の工場を開放して作り方を指導しました。できあがったプラウは豊治が、責任をもって検査し、「上川号」と、名前をつけて満州へ出荷しました。

【満州】日本が中国東北部に建てた傀儡^{かいらい}国家。一九三二(昭和七)年、清^{しん}の廃帝溥儀^{ふぎ}を執政^{しやくしやく}に迎えて建国。首都を新京^{しんきやう}(長春^{ちやうしん})に定めた。一九三四(昭和九年)以降帝政となり、一九四五(昭和二十)年、日本の敗戦で消滅。

【耕地】農作物を栽培するために耕す田や畑などの土地。

【畜力】家畜の労働力。農機具をひく家畜の力。

【畜力プラウ】馬で引かせるプラウのこと。今は、トラクタで引いている。

【篤農家】農業に熱心で研究的な農家のこと。

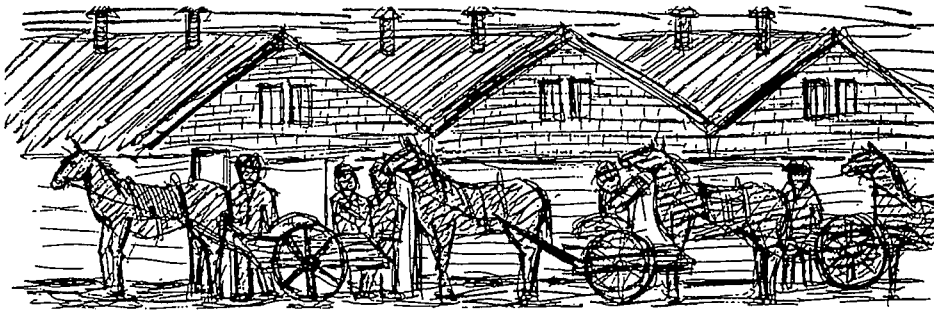
【満蒙開拓団】一九三二(昭和七年)のかつての満州国の建国以来、関東軍の軍事的要請と日本国内の農業問題打開のために推進された、満州国入植の武装移民団。第二次大戦末期にはその数二十七万人に達した。

■満州でプラウづくり

一九四一（昭和十六）年の春、日本および満州政府の推奨により菅野農機具製作所は満州開拓の移駐工場として、十人の従業員とその家族と共に、満州に骨をうめる覚悟で、吉林省に渡りました。

その出発近くに豊治は、お客に売った品物の代金を『いままでお世話になった』という感謝の気持ちで、ゼロにし、貸し借りをなくしました。満州では、国の政策にしたがつてプラウを専門に造るために、奥行二十五間のレンガ造りの大きな工場を、いくつも建てました。

豊治は、仕事になれない満州人に技術を教えていましたが、その人たちに、貴重な材料を盗まれてしまうこともありました。しかし、豊治は、そんな苦難にもたえながら百人以上の満州人を使い、やがて一日に五十台の畜力プラウを出荷するまでに発



展させました。

毎日、プラウの引き取り場所には長い列ができ、とても注文に応じきれないほどに繁盛しました。

【移駐】軍隊などが、よその地に移って、そこにとどまること。

【十人】佐野長吉、宮本剛、仲条正男、福島勇、三枝作二、菅野良孝、吉田義春、大石浅吉、福井谷忠作、福井谷孝作。

【奥行】家や土地の表から裏までの距離。

【二十五間】「間」は昔の長さの単位。一間は約一・八mで二十五間は、四十五m。

■厚い信用

この時、政府のすすめで北海道から十九工場の鍛冶屋が満州に渡りました。しかし、生産はなかなか軌道にのらず、生活が苦しくなり、しかたなく材料を売ってしまう会社もありました。

豊治は、いつも開拓農民によい製品を約束通りに渡すという使命感に燃え、たとえ何倍も高い値段で買いにきても、約束していない人には、絶対に製品を渡すことはありませんでした。

このように、品質のよい製品を計画どおり出荷する事業実績は、まもなく政府関係者などに認められ「工場を何倍

も拡張してプラウを増産してください」と、強く要請されるのでした。このことは、上富良野出身で拓殖公社の開拓民の窓口を担当していた、西村春治さんも語っていました。

「軌道」あることがらが、たどっていく道。

「拓殖公社」満州に移住して、畑を開墾する人の世話をするところ。

「西村春治」現在、上富良野町でラベンダー浴場を経営。

敗戦・暴動・豊治を守れ

プラウの製造は順調に進み、業績もあがり、工場の拡張工事が行なわれていた一九四五(昭和二十年)年、八月十五日に敗戦となりました。

ソ連兵が吉林市に侵攻してきて、日本人住宅地で暴動が始まりました。危険を感じた豊治は、工場をやむなく閉鎖しました。

逃げまわる人、逃げきれず殺される人たちの情報が入ってくる不安の中で、菅野の社員とその家族は、恐怖におびえながら、炊き出しのしたくに忙しく動きまわっていました。ソ連兵はマンドリン銃を突き付けて装飾品を強奪し声

高に「マダム・ダバイ」と女性を捜し廻る、婦人たちは強姦を恐れるために、髪を切つて丸坊主の男装になりました。同じ年の八月三十日、いよいよ、菅野農機具製作所がある向陽屯地区にも暴動が津波の様に高まり無差別に襲いかかつて様子は、まさに地獄絵でした。

工場を占領され、逃げ場を失った多くの日本人は、豊治の工場に逃げ込んで助けを求めました。豊治は、自分の身を危険にさらしながら、みんなの面倒をみていました。

ここで、なぜ豊治の工場が危害を受けなかったのでしょうか。多くの日本人は、いつもすべてのことで満州人を差別扱いしていたので、この時とばかりに仕返しをされたのです。しかし、豊治は、だれ一人として差別することなく交友を深めていたので、多くの満州人が、力を合わせて守ってくれたのです。しかし、後の文化大革命のときに、菅野製作所で通訳をしていた満州人は、日本人の味方をした言う罪で、問答無用と処刑されました。



【侵攻】敵地・外国へ侵入しうして攻めめること。

【暴動】組織のない多くの者が集まって、騒ぎを起こすこと。

【炊き出し】非常の場合、人々に飯を炊いて与えること。

【強姦】女子を力ずくでおかすこと。暴行。

【無惨】むごたらしいこと。

【虐殺】むごたらしく、ころすこと。

【占領】一定の場所を武力で占有すること。

【危害】生命をおびやかす、身体をきずつけること。

【文化大革命】中国全土で展開された一大政治社会運動で、無産階級文化大革命ともいう。(一九六六年五月～七六年一〇月)

【処刑】刑罰に処すること。とくに、死刑にすること。

青酸カリを手に

日増しに暴動は激しくなりました。みんなの食事がもう

すこしで、できあがるという時に、危険を感じた通訳の人

は、「早くここを出たほうがよい」と、すすめました。

出発の時に豊治は、万一虐殺されるときのことを考えて、

全員に青酸カリを渡し、「いざという時に飲め」。そして、

「何も持たないほうが安全だ」と、言い聞かせました。

そうして、みんなが心に覚悟をきめて、着の身着のまま

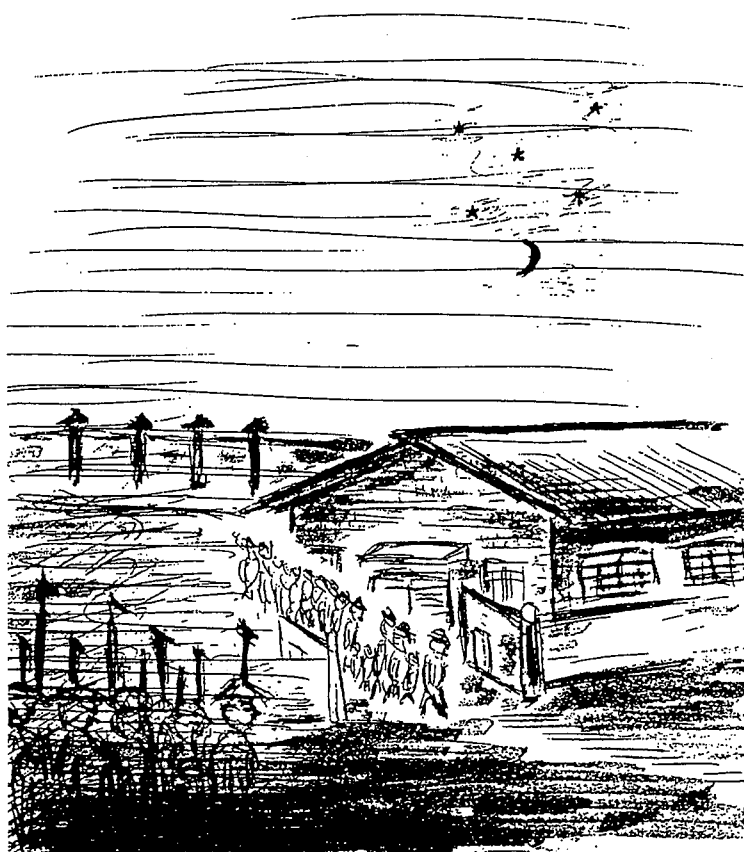
で夕方六時ごろ、豊治は塀の門をゆつくり開けて、逃げて

きた人たちと一緒に息をこらして声もださず、静かに一列
になつて歩き始めました。

暴徒たちはそれを見ていたのですが、危害を加えること
はいっさいしませんでした。

これで、すべてが白紙になり、裸一貫になったのです。

それから収容施設の生活が始まり、厳しい寒さが病氣や
飢えに追い打ちをかけるのでした。死体は山のように積み
上げられ、とてもこの世とは思えない悲惨なものでした。



他の人々は、逃^にげて^{とちゅう}いる途中で少しでも体が弱った人がいれば、みんなの足手^{あしで}まといになると言^いって捨^すてられ、また生まれ^うまれたばかりの赤ちゃんは、いつのまにか背中で死んでいるという状態^{じたい}でした。

涙^{なみだ}なしでは語れないと、当時十三才^{しやうじゅう}だった現在の祥孝社^{しやうこうしゃ}長^{ちやう}は、振^ふり返^{かえ}り話^わしています。

「着^きの身^み着^ぎのまま」着^きている物^{もの}のほかは何も持^もっていないこと。

「息^{いき}をこらして」息^{いき}をつめて、じつと成^{なり}り行^いきを見^み守^もる。

「暴^{ぼう}徒^と」暴^{ぼう}動^{どう}を起^{おこ}した者^{もの}どものこと。

「白^{しろ}紙^し」何^{なに}もなかつたとき^{とき}の状態^{じたい}。

「裸^{はだか}一^{いつ}貫^{かん}」自^{みづか}分の身^み体^{たい}のほかに、お金^{かね}や財^{ざい}産^{さん}など何^{なに}も持^もっていないこと。

再開業と厚情

*こころじやう

一九四六(昭和二十一年)八月十二日、大陸^{たいりく}の夢^{ゆめ}が碎^{くだ}かれ^{くた}た豊治^{とよぢ}は、故^こ国^{こく}の日本^{にっぽん}に船^{ふね}で帰^{かえ}ることになりました。

その二カ月後の十月十四日、故郷^{こきやう}の上富良野^{うふらの}に家族そろって到着^{とちやく}しました。しかし、着^きの身^み着^ぎのままでの北国^{ほくごく}の十月中旬^{じゅうしゅうちゅう}は、とても寒いものでした。

豊治^{とよぢ}には、住^すむ家^{いへ}がありませんでした。しかし、少年^{せうねん}のころから親友^{しんゆう}だった佐藤敬太郎^{さとうけいたろう}は、そのことを両親^{りやうしん}に話^わしました。両親^{りやうしん}は、こころよく自分^{みづか}たちが畑^{はたけ}への通^{とほ}い小屋^{こや}に移^{うつ}り住^すみ、豊治^{とよぢ}一家^{いけ}に自^{みづか}宅^{たく}を貸^かしました。借^かりた家^{いへ}の屋根^{やぐら}裏^{うら}から星^{ほし}が見^みえました。その星^{ほし}を眺^{なが}めながら寝^ねた豊治^{とよぢ}は、「極^{ごく}楽^{らく}のようだ」と、言^いっていました。

裸^{はだか}一^{いつ}貫^{かん}で帰^{かえ}ってきた

二カ月後の雪^{ゆき}深い十二月に、豊治^{とよぢ}は疲^{つか}れた体^{たい}と、痛^{いた}んだ心^{こころ}を休^{やす}めると、暇^{ひま}もなく間^ま口^{ぐち}三^{さん}間^{かん}、奥^{おく}行^{ゆき}六^{ろく}間^{かん}の大^{だい}きさの工^{こう}場^ばを建^たて、再^{また}び商^{しょう}売^{ばい}を始^{はじ}めました。一文^{いちもん}なしで帰^{かえ}ってきたというのに、工^{こう}場^ばの棟^{むね}上^{うへ}げの夜^よ、棟^{むね}梁^{りやう}から手^て伝^{でん}いの大^{だい}工^{こう}ま^まで、どうやって準^{じゅん}備^びしたのか祝^{しゆき}儀^ぎ袋^{ふくろ}を渡^わして、お礼^{れい}を言^いいました。



五十二才の豊治は、心魂*しんこんをかたむけてプラウの製作に打ち込んでいました。この情熱と闘志に人々は心をうたれ、やがて「豊治が帰ってきたぞ」と、村中に知れわたりました。農家の人々は、六年前に豊治が満州へ出発するとき、品物の代金をゼロにしてもらったことを忘れていませんでした。朝、工場の前にはイモ、麦の俵が積んであり、入口のムシロ戸の中には米、ソバ、野菜、豆。そして、ドブロク*までいろいろな品物が毎日届けられていました。こうして、お互いの厚情*こうじょうのきずなは一層深くなっていき、豊治にとっては、報恩*ほうおんと感謝の日々だったのです。

【厚情】親切な心。

【故国】外国へ行ったとき、自分のうまれた国をさしていることば。

【通い小屋】畑のそばにあつて、農機具などが置いてあり、休憩する小屋。

【間口】家などの前がわのはば。

【三間】間は昔の長さの単位、一間は約一・八mで、三間は五・四m。

【工場】「土の館」のなかに再現されています。

【一文なし】お金のぜんぜんないこと。

【棟上げ】家を建てる時、柱などを組み立て、その上にむな木をあげること。

【棟梁】大工の頭かしら。親方。

【祝儀袋】お祝いするとき、人におくるお金のはいった袋。

【心魂】精神。たましい。

【ムシロ戸】タケ・イグサ・わらなどをあんできつった戸。

【ドブロク】米とこうじをはっこうさせて、かすをこさないで飲む酒。

【報恩】恩にむくいること。恩返し。

なぜ「白」か

菅野の製品は、満州から引き揚げあてきたときから、白い塗装とそうになりました。

塗装を「なぜ、白にしたのか」と、聞かれたとき豊治は、「白はごまかしのできない、混ざまっていない色である」そして、「商売はつねにお客さまに裁さかれて存在そんざいしている」「白はどこにあつても目につく、したがってお客さまが何

年もかかって使い終わるまで、良質の性能を維持いじする製品を造らなければならない」「ご愛用者に感謝の気持ちで、農業に役に立つ仕事をするのだ」と、説明していました。

現在、そのことばは、「白*の理念りねん」として、社訓*しゃくんになっています。



【理念】ものを正しくはんだんする心からうまれた、理想的な考え方。

【白の理念】白は真心のこもった製品を創る信念です。

白は農業に役立つ企業でありたいと願う社員の心です。
スガノ農機は白の理念を追求する集団です。

【社訓】会社経営のおしえ。

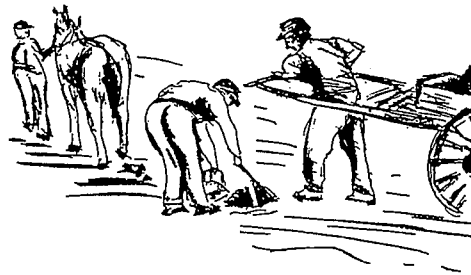
*たいはちぐるま

大八車で土づくり

長男の良孝は、シベリアからまだ復員していなかったため、次男の祥孝は、豊治の向こう打ちを手伝っていました。

祥孝は、朝も晩も仮住まいの家から工場までの二キロ半を、大きな大八車を引いて通っていました。その大八車には、りんご箱が積んであり、道路に落ちてゐる馬ふんを拾い集めていました。そして、そのりんご箱が馬ふんでいっぱいになると、工場の横に積み上げておき、農家の人々に、「たい肥に使ってください」と、あげていたのです。

父に「土づくりの手伝いをするのだよ」と、言い聞かされていたのですが、子供であつた祥孝にとって、その馬ふんひろいは大変に嫌な日課でした。



【大八車】へもと八人分の代わりの意味で、代八車とも書いた。大きな荷車。

【復員】よび集められた軍人が軍の仕事から解放されて帰ること。

【向こう打ち】向かいあつて、おたがいにハンマーで鉄を打つこと。

【馬ふん】馬のくそ。

【たい肥】作物の生育に必要なもの。わら・草などをくささせた肥料。

日本中にプラウを出すのだ

従業員は、十五才の少年三人と十四才の祥孝しかいなく、仕事はだんだん忙しくなつていきました。

豊治は祥孝に、「ここから日本中にプラウを出すのだ」と、毎日毎日説き聞かせ、夢を与えました。幼少だった祥孝は、「ここに消えた満州の工場を再現するのだ」と、思っていました。そして、後になつてもつと深い意味があることにきづき、農業参画へと心を動かされることになったのです。



【三人】南富良野村、金山出身者で、駒井徹、山本勇、高岡友次郎。

【参画】計画に加わること。計画にあずかること。

■仕事への厳しさ・広い心

商売を始めようとしていた豊治の友人数人が、銀行から資金を借りるための連帯保証人の最後の人になつてほしいと、豊治の所へ頼みにきました。豊治は、みんなの前でただ断るのではなく「付き合ひや義理で保証人になつてはいけない」「先を見通して成功するか失敗するか、はつきり言えなければ本当の保証人の資格はない」「商売を始めるあなたが、まずしつかり信用をつけるべきだ」と、言い聞かせました。しかし、彼らは商売を始め、数年後に失敗して倒産してしまいました。

このような厳しい豊治にも、人一倍の面倒を見る世話好きなどころがありました。

ある時、宗派の違ふお寺のふたば幼稚園の存続問題に力を貸したことで、園児から「おじいちゃん！おじいちゃん！」と、先生以上に慕われていました。何年もたった今でも聞信寺の住職の説教の中で、そのことが語られています。

また、冗談話をしながら酒でも飲めば浪花節をうなると



いう、おおらかで心の広い人でもありました。

【連帯保証人】借金・身元などを保証するために、連合して責任を負う人のこと。

【宗派】同じ宗教のなかにある、いくつかのわかれ。

【住職】寺院の主管者である僧。

【浪花節】大衆演芸の一つ。三味線を伴奏とし、一人の演者がわかりやすい節調で語る語り物。

■町の親父

豊治には、強い奉仕の精神もありました。ある時、会田久左エ門は上富良野町の発展を願つて、十勝岳にある現在の凌雲閣温泉の開発に挑みました。それに対して、町の人々は、だれ一人として応援しませんでした。しかし、豊治だけが、損得なしで温泉づくりをめざす彼の生きかたに感動し、道のない山を社員らと一緒に登り、物心両面から支援しました。そして、ついに開発を成功させました。

また、聞信寺の幼稚園の仕事など、数えあげればきりがなく、町内で一番たよになる親父さんでした。

豊治は、満洲からの引き揚げ船の中で歌を詠んでいました。それは、晩年の人生観をよくあらわしています。

「ふるさとえ 錦着忘れ 丸裸寒さ身にしむ 朝な夕なに」
 「落ちおれて 袖に涙のかゝる 時人の心の 奥ぞ知らるゝ」

忘るるな人のご恩を

昭和二十一年九月二十日 引揚船中にて 豊治

(この歌は、菅野家の墓に歌碑として建立されている)
 また、同時に次の歌も詠んでいます。

「ふるさとえ 錦着どころか ぼろも着ず

ふんどし一つの 軽き林かな」

一九六五(昭和四十)年二月

二十一日、社業が順調に発展

している時に、豊治は事務所

で、突然心筋梗塞に襲われ、

七十二才を一期として生涯を

終えました。



【会田久左エ門】 満州の引き揚者で、大成木工製作所を設立した一人。

稲・畑の苗床用資材を製作していた。

【物心】物質と精神。

【詠む】詩や歌をつくる。

【歌碑】和歌をきざんで立てた石碑。

【社業】会社の事業。

【心筋梗塞】心臓に栄養を送る冠状動脈の閉塞などにより、血行が止まり、その支配域の心筋が酸素欠乏により急激に壊死に陥る状態。

【二期】一生。

報恩・顕彰

一九七八(昭和五十三)年二月、穂吉元専務らの呼びかけ

で、創業者胸像建立期成会がつくられ、社員と関係有志の

寄付などにより、創業者夫妻の立派な胸像ができました。

それは、創業者の偉業を受け継ぎ、社業発展の糧とする

ためでした。

そして、一九九一(平成三)年、現在の祥孝社長らが、心

に思いつづけていた、菅野豊治の記念館「土の館」が、建

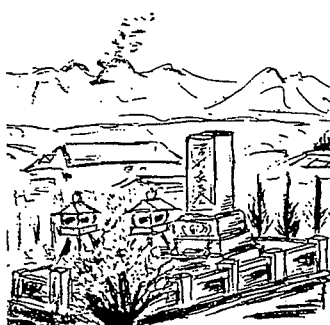
設されました。その場所は、豊治

と、豊治の友人や恩人の墓所があ

る上富良野町の西山の台地です。

そこは、白い噴煙が天にあがる十

勝岳連峰が、一望できる場所です。



【報恩】恩にむくいること。恩返し。

【顕彰】てがらや徳などを明らかにあらわすこと。

【胸像建立期成会】胸から上の部分をかたどった像を建てることを目的とする会。

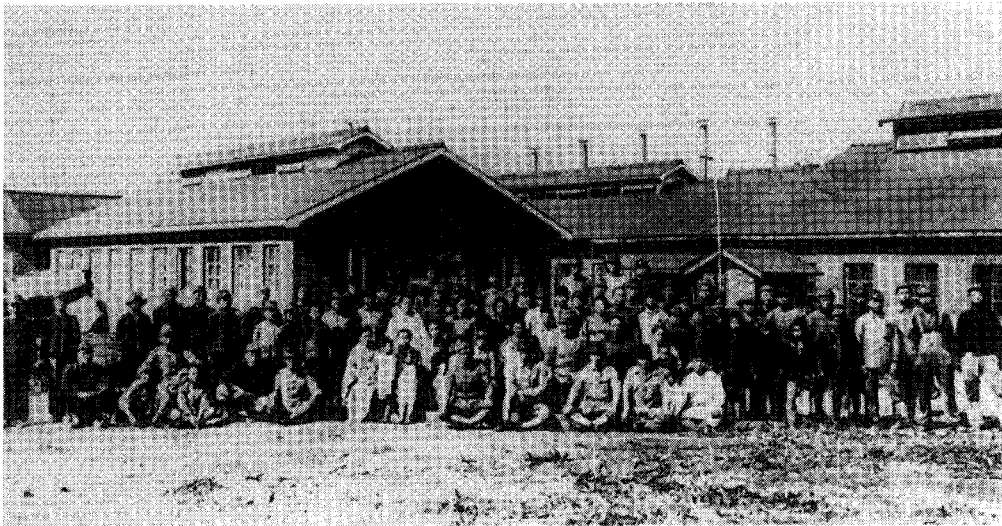
【偉業】すぐれた大きな仕事。

【糧】人の精神をやしなうもの。活動のみなもと。力づけるもの。

【土の館】私たちが生きていくのに、必要な食料を生産している農業とは何か？世界のプラウと全国の土も展示している。



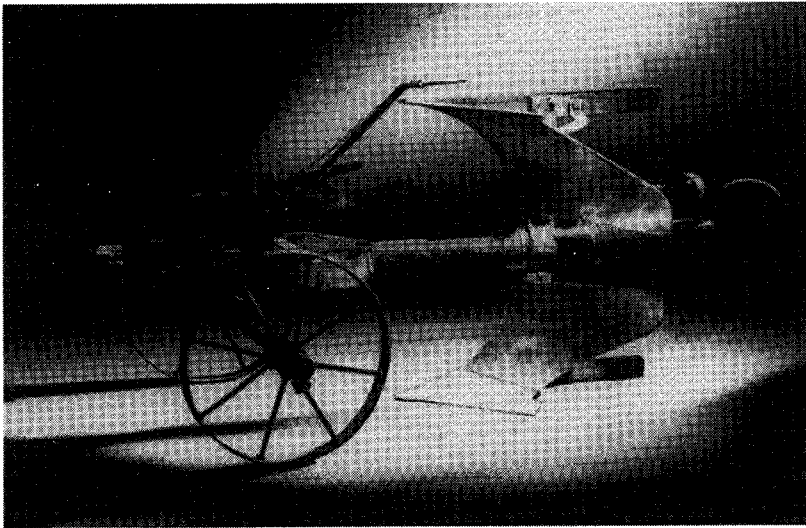
創業者、菅野豊治



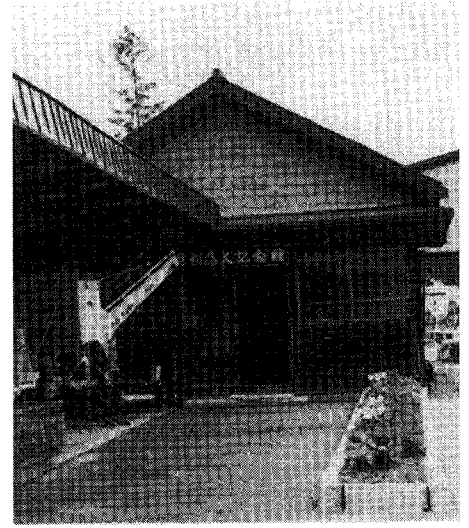
昭和18年、満州国吉林市の工場の前で従業員と撮る

菅野豊治の足あと

- 一八九四(明治二七)年 九月、岩手県江刺市で誕生する。
- 一九〇六(明治三九)年 六月、父母と上富良野村に移住。農業に従事する。
- 一九一〇(明治四三)年 一月、松岡鉄工場に丁稚奉公に入る。
- 一九一七(大正六)年 二月、菅野農機具製作所を開業する。
- 一九一九(大正八)年 九月、三枝サツと結婚する。
- 一九三〇(昭和五)年 北海道農事試験場において比較審査で「六寸深耕プラウ」優良農具に入選する。
- 一九三二(昭和七)年 北海道農事試験場において比較審査で「八寸深耕プラウ」優良農具に入選する。
- 一九三五(昭和一〇)年 北海道農事試験場において比較審査で「水田プラウ」優良農具に入選する。
- 一九三六(昭和一一)年 青森県において「ディスクハロー」県補助推奨農具になる。
- 一九三七(昭和一二)年 北海道庁殖民課主催の比較審査で「新墾プラウ」「再墾プラウ」優良農具に入選する。
- 一九三九(昭和一四)年 満州国(ハルビン市)において比較審査で「新墾プラウ」甲第一位、「再墾プラウ」甲第二位、入賞する。
- 一九四一(昭和一六)年 政府の要請で満州国吉林市に工場を移転、操業する。
- 一九四三(昭和一八)年 「畜力プラウ」を日産五十台生産する。



国産第1号、畜力リバーシブルプラウ(一頭七分曳)



再開業の工場

一九四四(昭和一九)年

満州国(新京市)開拓総局主催プラウ比較審査で「再墾二頭曳プラウ」第一位、「新墾二頭曳プラウ」第二位、「兼用二頭曳プラウ」第三位に入賞する。

一九四六(昭和二一)年

十月、満州より上富良野に着く。

〃

十二月、工場建設、再開業する。

〃

商標を『白』と定める。

一九四九(昭和二四)年

北海道庁主催(旭川市、帯広市)開拓者用プラウ比較審査で「兼用プラウ」最優秀に入選する。

〃

福島県庁主催プラウ比較審査で「再墾一頭三分プラウ」優秀に入選する。

一九五二(昭和二七)年

「畜力リバーシブルプラウ」を開発する。

〃

日本農業機械化大博覧会(旭川市)、出品七機種が全て入選合格し、金牌受賞する。

一九五八(昭和二三)年

スガノ農機株式会社を設立、事業拡大をはかる。

一九五九(昭和三四)年

「大型トラクタ用プラウ」第一号完成する。

一九六一(昭和三六)年

「スリックプラウ」開発する。

〃

「ビートタッパー」の自動高低装置を開発する。

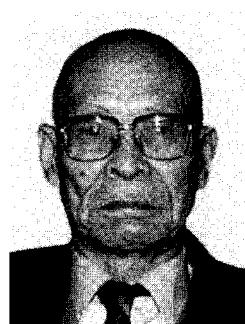
一九六四(昭和三九)年

「ビートハーベスター」開発する。

一九六五(昭和四〇)年

二月二十一日、豊治急死。のちに、命日を創業記念日とする。

〔原作者〕



金子 全一（かねこぜんいち）

一九〇八（明治四一）年生まれ

きくや呉服店二代目会長

住所・上富良野町錦町

菅野豊治を語る

1992年 7 月 1 日 第 1 刷発行

2010年 9 月 22 日 第15刷発行

発行 **入力／農機株式会社**

〒300-0405 茨城県稲敷郡美浦村大字間野字天神台300

☎029-886-0031 FAX029-886-0030
